

唐書に「高宗、咸亨（かんかう）年中に倭国の使、始てあらためて日本（にほん）と号す。其国東にあり。日の出所（いづるところ）に近（き）を云ふ」と載（せ）たり。此事、我国の古記にはたしかならず。

推古天皇の御時、もろこしの隋朝より使ありて書をおくれりしに、倭皇とかく。聖徳太子みづから筆を取りて、返牒を書（き）給しには「東天皇敬白西皇帝」とありき。

かの国よりは倭と書（き）たれど、返牒には日本とも倭ともせられず。是より上代には牒ありともみえざる也。

唐の咸亨の比は天智の御代にあたりたれば、実（まこと）には件（くだり）の比（ころ）より日本と書（き）て送られけるにや。

又、此国をば秋津州（あきつしま）といふ。神武天皇、国のかたちをめぐらしのぞみ給て「蜻蛉（あきつ）の醫祇（となめ）の如くあるかな」との給しより、此名ありきとぞ。

しかれど、神代に豊秋津根（とよあきつね）と云名あれば、神武にはじめざるにや。此外（このほか）もあまた名あり。

細戈（くはしほこ）の千足（ちたるの）国とも、磯輪上（しわかみ）の秀真（ほつま）の国とも、玉垣（たまかき）の内国（うちつくに）ともいへり。

又、扶桑（ふさう）国と云名もあるか。「東海の中に扶桑の木あり。日の出所（いづるところ）なり。」とみえたり。

日本も東にあれば、よそへていへるか。此国に彼（かの）木ありと云事、きこえねば、たしかなる名にはあらざるべし。

又（そ）内典（仏典）の説に、須弥（しゆみ）と云山あり。此山をめぐりて七（ななつ）の金山（こんせん）あり。其中間は、皆、香水海（かうするかい）なり。

金山の外（そと）に四大海（しだいかい）あり。此海中に四大州あり。州ごとに又二（ふたつ）の中州（ちゆうしう）あり。

南州をば瞻部（せんぶ）と云（又、閻浮提（えんぶだい）と云ふ。同（じ）ことばの転也）。是は、樹（うゑき：樹木）の名なり。

南州の中心に阿耨達（あのかたつ）と云山あり。山頂（やまのいただき）に池あり（阿耨達、ここには無熱（ぶねつ）と云（い）ふ。外書（げしよ：儒教書のこと、ゲテ物の語源である外典ともいう）に昆崙（こんろん）といへるは、即、この山なり）。

池の傍（かたはら）に此（この）樹（贍部）あり。匝（めぐり：周囲）七由旬（ゆじゆん）、高（たかさ）百由旬なり（一由旬とは四十里也。六尺を一步（いちぶ）とす。三百六十歩を一里（り）とす。この里をもちて由旬をはかるべし）。此樹、州の中心にありて最も高し。よりにて州（南州）の名とす。

阿耨達（あのかたつ）山の南は、大雪山（だいせつせん：ヒマ・アラヤ）。北は玉葱嶺（そうれい）なり。

葱嶺の北は、胡国（ここく）。雪山の南は五天竺（ごてんぢく）。東北によりては、震旦（しんたん）国。西北にあたりては波斯（はし）国也。

此贍部（せんぶ）州は縦横（じうわう）七千由旬、里をもちてかぞふれば二十八万里。東海より西海にいたるまで九万里。南海より北海にいたるまで又九万里。

天竺は正中（たゞなか）によれり。よりにて贍部の中国とす也。地のめぐり、又、九万里。震旦ひろしと云へども五天竺にならぶれば一辺の小国なり。日本は彼の土をはなれて海中にあり。

北嶺（ほくれい）の伝教大師、南都の護命僧正（ごみやうそうじやう）は中州（ちゆうしう）也とするされたり。しからば南州と東州との中（なか）なる遮摩羅（しやもら）と云州なるべきにや。

華嚴經（けごんきやう）に「東北の海中に山あり。金剛山（こんがうせん）と云（い）ふ」とあるは大倭（やまと）の金剛山の事也とぞ。

されば、此国は、天竺よりも震旦よりも東北の大海の中にあり。別の州にして神明の皇統を伝へ給へる国也。

同（じ）世界の中なれば、天地開闢の初はいづくもかはるべきならねど、三国（天竺・震旦・日本）の説、各（おのおのもの）ことなれり。

天竺の説には、世の始りを、劫初（こふしよ）と云ふ（劫（こう）に成（じやう）住（ぢゆう）壊（え）空（くう）の四（よつ）あり。各、二十の増減あり。一増一減を、一小劫と云ふ。二十の増減を、一中劫と云ふ。四十劫を合（せ）て一大劫と云ふ）。

光音（くわうおん）と云ふ天衆（てんじゆ：天の住民）、空中に金色（こんじき）の雲をおこし、梵天（ぼんてん）に偏布（へんぷ：広くおおう）ひて、即ち、大雨（だいう）をふらす。

（その雨水が）風輪（ふうりん）の上につもりて、水輪（すゐりん）となり、増長（ぞうちやう）して天上にいたれり。

又、大風ありて、沫（あわ）を吹立（ふきたて）て、空中になげおく。即、（それが）大梵天の宮殿となる。

其水、次第に退下（たいげ）して、欲（よく）界の諸宮殿、乃至、須弥山・四大州・鉄圍山（てつゐせん）をなす。

かくて（このようにして）万億の世界、同時になる。是を成劫（じやうこふ）と云也（此万億の世界を、三千大千世界といふなり）。

光音の天衆（てんじゆ：天の住民）、下生（げしやう：地上に降りること）して次第に住す。是を住劫（ぢゆうこふ）と云ふ。

此の住劫の間に、二十の増減あるべし、とぞ。其初には、人の身、光明（くわうみやう）とほく照して、飛行、自在也。歡喜を以（もち）て食とす。男女（なんによ）の相（さう）なし。

後に、地より甘泉（かんせん）、涌出（ゆうしゆつ）す。味（あぢはひ）、酥密（そみつ：牛乳を精製し蜂蜜を混ぜた飲み物）のごとし（或は、地味（ちみ）とも云）。これをなめて味着（みちやく：美味に執着する煩惱）を生ず。

仍（よりにて）神通（じんづう：神通力のこと。仏教では六神通といい、仏・菩薩などが持っていると言われる6種の超人的能力）を失ひ、光明（くわうみやう）もきえて、世間（せけん）大（おほき）にくらくなる。

衆生（しゆじやう）の報（むくい）しからしめ（衆生のおこないに対する報いがしからしめ）ければ、黒風（黒い風が）海を吹（ふき）て、日月二輪を漂出（へうしゆつ：空に漂わせ）し、須弥の半腹（須弥山の中腹）におきて四天下（してんげ：世界）を照さしむ。

是より始て昼夜（ちうや）・晦朔（くわいさく：月のはじめと終わり）・春秋（しゆんじう）あり。

（衆生が）地味に耽（ふけり）しより顔色（がんしよく）も、かじけおとろへ（憔悴する）き。地味、又、うせて、林藤（りんとう）と云物あり（或は地皮とも云）。

衆生、又、食（じき：食料）とす。林藤、又、うせて自然の秬稻（かうたう：うるちのお米）あり。（うるち米）諸（もろもろ）の美味（びみ）をそなへたり。朝（あした）に刈れば夕（ゆふべ）に熟（じゆく）す。

此の稻米（たうまい）を食（じき）せしによりて、身に殘穢（ざんえ：食べかす）出できぬ。

此れ故に、始て二道（にだう：食べかすを排泄する二つの器官）あり。

男女の相ひ各（おのもおのも）別にして、つひに姪欲（いんよく）のわぎをなす。

夫婦（ふうふ）となづけ、舎宅（しやたく）を構（かまへ）て共に住（すみ）き。

光音の諸天、後（のち）に下生（げしやう）する者、女人（によにん）の胎中（たいちゆう）にいりて、胎生（たいせい）の衆生となる。

其後（そのち）稲（うるち米）生（しやう）ぜず。衆生、うれへなげきて、各（おのもおのも）境（さかひ）をわかち（境界線を引いて）田種（でんしゆ）を施（ほどこ）し植ゑて（田に稲だねを植えて）食（食料）とす。

他人の田種（他人の植えた稲）をさへ、うばひぬすむ者出来（いでき）て、互にうち争ふ。

是を決する人（この争いを裁く人）なかりしかば、衆、共（とも）にはからひて、一人（ひとり）の桀等王（びやうどうわう）を立つ。名（づけ）て刹帝利（せつていり）と云（田主（でんしゆ）と云ふ心（意味）なり）。

其の始めの王を民主王と号しき。十善（ぜん）の正法（しやうぽふ）をおこなひて（仏教でいう十全戒をたもつこと）、国を、をさめしかば、人民、是を（民主王を）敬愛す。

閻浮提の天下（てんげ：古代インドの世界は）豊楽安穩（ぶらくあんのおん）にして、病患（びやうかん）、及び、大寒熱（酷寒・猛暑）あることなく、寿命（じゆみやう）も極（きはめ）て久（ひさしく）無量歳（むりやうざい）なりき。

民主の子孫、相続して久く君たりし（民主王の子孫が王位を継承した）が、漸（やうやく：段々に）正法も衰（おとろへ）しより、寿命も減（げん）じて八万四千歳にいたる。身のたけ、八丈（はちぢやう）なり。

其の間（あひだ）に王ありて転輪（てんりん）の果報（くわはう：転輪の聖王が道を行くとき、金銀銅鉄の宝器である輪宝が先進して道をならすという法力）を具足（ぐそく：備えていた）せり。

先（ま）づ、天より金輪宝（こんりんほう）飛降（とびくだり）て王の前に現在（出現すること）す。

王、出（い）で給（たまふ：道を行く）ことあれば、此輪（りん）、転行（てんぎやう：王の前をころがる）して、もろもろの小王（せうわう）みなむかへ拜す。あへて違（たがふ）者なし。即（すなはち）四大州に主（あるじ：君主）たり。

て、象（ざう：白象宝）・馬（め：紺馬宝）・珠（しゆ：神珠寶）・玉女（ぎよくによ：玉女宝）・居士（こじ：居士宝）・主兵（しゆひやう：主兵宝）等の宝（たから）あり。此の七宝（上記六宝に金輪宝）成就（じやうじゆ：入手）するを、金輪王となづく。

次々（つぎつぎ：その下に次々に）、銀・銅・鉄の転輪王あり。福力（ふくりき：この四種の転輪王の持つ福力は）、不同（ふどう：同じでなく、それぞれ違う）によりて、果報も次第に劣れる（順次、下がる）也。

寿量（じゆりやう：人の寿命）も、百年に（百年につき）一年を減じ（短くなり）、身のたけも同じく（百年につき）一尺を減（じ）てけり。

百二十歳にあたりし時、釈迦仏（しやかぶつ）出（い）で給（ふ）（或は百才（の）時とも云ふ。是よりさきに三仏（さんぶつ：人の寿命が六万歳の時、拘留孫仏<くるそんぶつ>が、四万歳の時、俱那含牟尼仏<くくなごんむにぶつ>が、二万歳の時、迦葉仏<かしょうぶつ>が）出（い）で給（ひ）き）。